第23回

私の古典学習法

本誌審査委員　幕田　魁心〈前編〉

古典の持つ「美」を深く正確に読み取る

私にとって書の考え方の根底をなすものは、師・安藤搨石（あんどうとうせき）の書理論である。その一端を述べてみる。

Ⅰ　師・安藤搨石との出会い

私が大東文化大学へ入学し、最初に受けた授業が安藤搨石先生であった。それは、私にとって実に衝撃的であった。

黒板いっぱいに「情熱の持続」と板書し、書に対する姿勢を話され、実技に入ると、「一字書いて疲れないような臨書は駄目だ」という。「なぞって良いから法帖をそのままそっくりに書け」という。しかも、「一字に十分、二十分を費やし、髪の毛一本の空間の誤差も見逃してはならない」「目の痛くならないような臨書は無意味だ」「必要とあれば

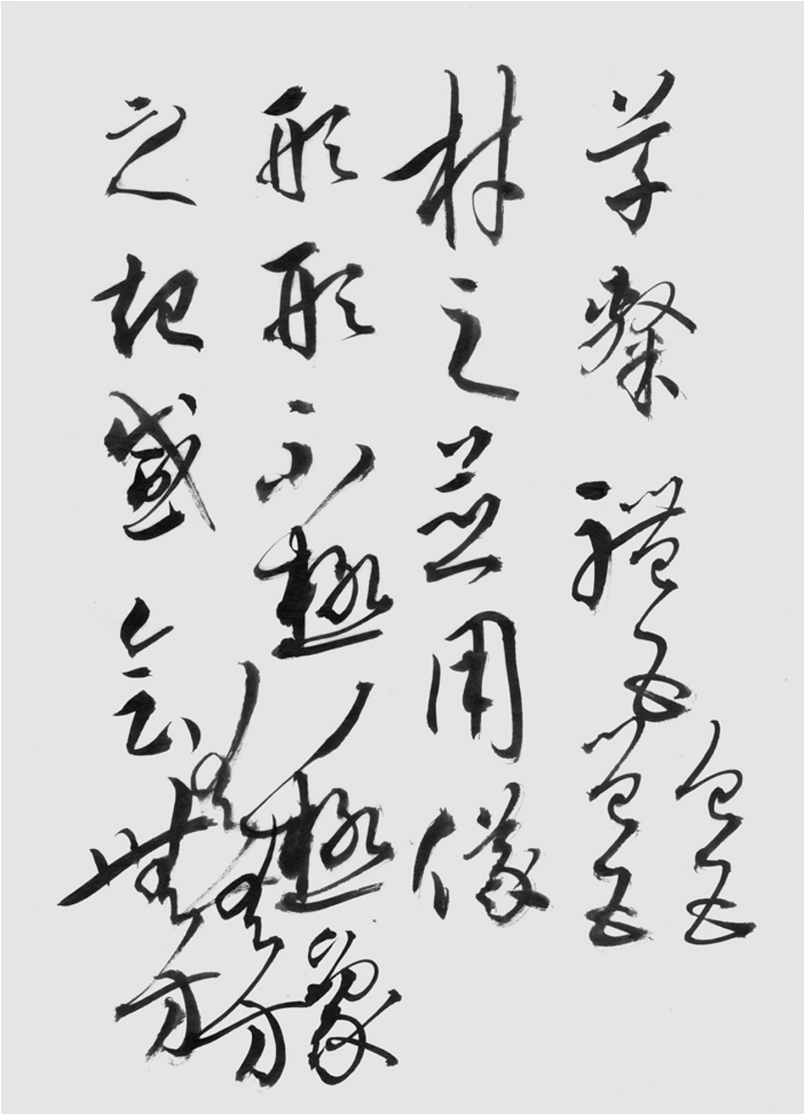

図1　約二十年前に臨書した「書譜（しょふ）」　リズムや字形の違った箇所を何度か書き直し、字形、章法、変化等を正確に読みとる臨書を心がけている

■プロフィール

幕田　隆（まくた　たかし）
雅号　幕田　魁心（まくた　かいしん）

〈略歴〉
昭和22年　福岡県北九州市に生まれる
昭和38年　福岡県立戸畑高等学校入学
　　豊島嘉穂先生に指導を受ける
昭和42年　大東文化大学中国文学科入学
　　安藤搨石先生に師事
昭和46年　大東文化大学中国文学科卒業
千葉県立高等学校教諭として30年間勤める
平成13年より千葉大学にて13年間書道を指導、現在、魁心書法院主幹。

〈著書〉
『極める！シリーズ』全6巻、『創作への道』全6巻、『百人一首』、『篆隷楷行草書体で書く一字書～五字書』全7巻、『書になった童謡たち』、『一期一会』他。高等学校書道教科書執筆。

〈個展〉
銀座鳩居堂画廊、東京銀座画廊美術館、菱川師宣記念館、北京、ニューヨーク、パリ日本文化会館、中尊寺他

〈作品所蔵〉
パリ・マドレーヌ寺院、ニューヨーク総領事館、韓国芸術殿堂、中国紹興市博物館、メリーランド州立大学、中尊寺他

〈叙勲〉
平成28年フランス・アンクラジュマン・ピュブリック・社会功労奨励勲章受章

図2 (A)「九成宮醴泉銘」の臨書

(B)「曹全碑」の臨書

(A)(B)は、門人・現在東京学芸大学書道専攻二年の中山心路君の臨書である。克明な臨書であり、×は再度挑戦する、○は一応完成した印。こうした臨書態度が安藤搨石流である

定規、分度器、拡大鏡を駆使して似せよ」という。「半紙に四字ないし六字を書くのは競書雑誌の方便のために奨励された大きさであり、最初から四字・六字と決めて習うような雑駁な神経では、書いた人の微妙な筆使い、指使い、心理といったものを掴むことができない」ともいう。

兎に角、九州の田舎から出て来たばかりの私にとって、先生の口から発せられる言葉はすべて、私の持っていた常識を遥かに超えるものであり、衝撃的な九十分であった。

いつしか私は搨石先生の虜になった。先生は五十八歳で亡くなられた（当時私は二十五歳）ので、晩年の七年間指導を受けたことになる。その書理論をⅡ章からⅣ章までで述べてみる。

Ⅱ 古典

書を勉強する者にとって、「古典」は必要不可欠なものであり、書の美を会得する原点である。古典を正しく学べば、書の一般的法則に習熟することができ、古典は扱う者に無限の変化をもたらす。だから探れば探るほど、美を提供してくれるが、探れなくなった場合はその人の目が止まっている時であり、美は

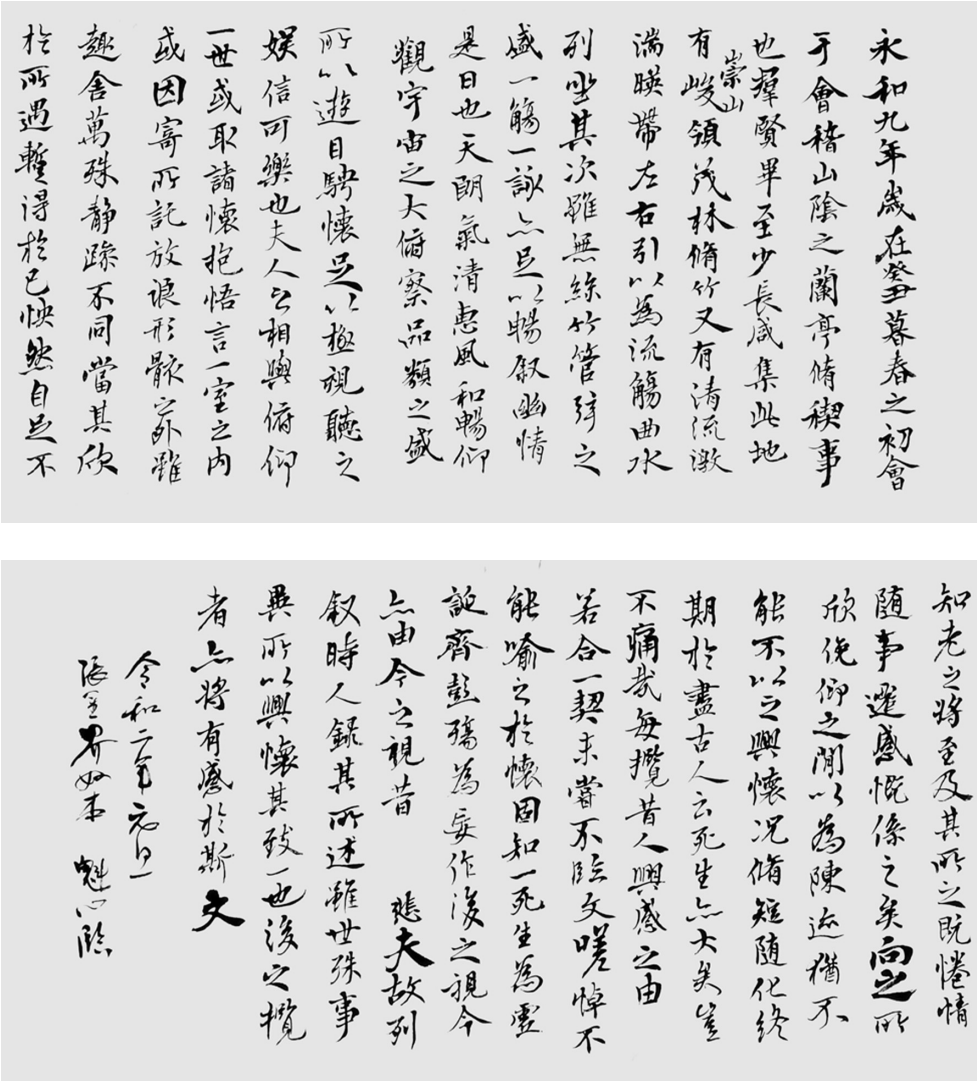

図3　「蘭亭序」の臨書
大みそかから元旦にかけて五時間を費やす。これが完成して、書三昧の一年がスタートする

何も答えてくれない。そして、その人の力に応じてくれるのも古典である。

しかし、あくまでも古典というのは、時代を超えた普遍的法則である。故に、古典に対して絶大なる信服を寄せる必要がある。そして、その古典から我々はさまざまな「典」を学ぶことにより、その人固有の個性を生むことができる。

III　臨書

名品というのは、優れた部品によって精妙な関係に組み立てられた構造を持っている。我々はまず、一点一画の部品を確実に捉える作業から入る必要がある。一点の大きさ、方向、位置、点と点の空間等に髪の毛一本の誤差があっても、その名品の持つ精妙な関係を壊すものとなる。このぐらいだろうという妥協は臨書には許されない。「感じ」が似ていればいいという臨書では、いつまで経っても鋭敏な感覚は養われない。

臨書で重大なことは、自分の持っている癖を取ることである。それが純粋な個性を生む大きな原動力となる。碑法帖の反復練習によって新しい発見を繰り返すことで個性は生まれる。

古典の臨書は、自己強制、自己修正、自己教育、自己革命である。

Ⅳ　技術

芸術家たる前に優れた職人たれ。優れた職人というのは、一つの皿なら皿を百個作っても同じ厚さ、同じ大きさに再現する技術を持ち、しかも早く作れるという神技にも似た技術を持ち得た人のことである。

つまり技術とは、法帖を再現する腕であり、鋭い視線で法帖に向かい、古典の法則を読み取り、マンネリズムを打破し、新しい発見をする目である。そして、厳しい鍛錬を乗り越えた者のみが「美」をつかむ資格がある。

だから我々にとって、臨書は一生の日常作務である。

Ⅴ　一日五時間

こうした独特な書学方法論を打ち立てた揚石は、毎日五時間の臨書をしていた。ある時、「君は昨日、何時間臨書をした？」と問われ、「三時間です」と答えると、「君は僕を超える気は無いのか！」と叱咤（しった）された。それ以後、一日五時間が私の命題となり、五十三歳で高校の教員を辞めるまで必死にこの五時間を目指して「美」の仕入れを行った。「探れば探るほど無限の可能性が広がる」「厳しい鍛錬を乗り越えた者のみ〝美〟を掴むことができる」という師の言葉を信じて。

Ⅵ　除夜の鐘とともに

私は、『蘭亭序』を一年の書き納め、書き初めとしている。十二月三十一日の午後九時頃より臨書し始め、一月一日の午前二時頃終了する。つまり、除夜の鐘が鳴っている時は『蘭亭序』を臨書しているのが習わしである。もうかれこれ五十年続けている。

Ⅶ　臨書から創作へ

私は三十年間高校の書道教諭として生徒を指導したが、その中で、そこそこ臨書ができるようになっても創作の段階になると、そこには乗り越え難い壁があることを感じていた。しかしそれは高校生に限らず、書を志す全ての人に共通することではないだろうか。それを解決する方法は、唯一「倣書」（ほうしょ）である。

図4　「極める！シリーズ」　代表的な名跡、七種類の字形、用筆の特徴を細かく分析・図解し、倣書・創作へと展開。個性的な書を表現するための指南書

そこで私は指南書の執筆を始めた。平成十三年一月、木耳社（もくじしゃ）より初めて上梓したのが、『極める！楷書　創作へのみちしるべ』である。その後、〝極める！シリーズ〟として隷（れい）書、行書、草書、篆（てんしょ）書を上梓した。書体ごとに名跡七種類の法帖を取り上げ、各法帖の基本的な知識や技法を解説し、字形・用筆の特色を分析した。

倣書は、古典の持つ「美」を深く正確に読み取らねばならない。それには「観察力」「技術」「思考力」を高めることが不可欠。次回は、その方法を具体的に示したい。